

# 「日本の気候変動2025」の公表予定について

令和7年1月31日  
気象庁気候変動対策推進室

# 「日本の気候変動2025」作成の経緯

- 気候変動が世界及び各地域で進行。  
→ パリ協定の採択・発効（2°C目標）。
- 日本では、気候変動適応法に基づく気候変動適応計画を閣議決定（2018年）。気候変動対策は科学的知見に基づいて実施することとされる。
- 文部科学省・気象庁は、国民の皆様・事業者・地方公共団体・国が、気候変動対策の基盤情報として使えるよう、自然科学的知見を取りまとめた『日本の気候変動2020』を作成。  
→ 環境省の『気候変動影響評価報告書』等に活用。



「日本の気候変動2020」  
(2020年12月公開)

今回、最新の知見・成果を盛り込んだ『日本の気候変動2025』を作成。

→ **2025年3月**公開予定

日本における気候変動に関して観測結果と将来予測を取りまとめた資料。

- ✓ 日本及びその周辺における大気中の温室効果ガスの状況や、気候システムを構成する諸要素（気温や降水、海面水位、海水温など）の観測結果と将来予測をまとめた。
- ✓ 将来の気候は、**2°C上昇シナリオ**（SSP1-2.6/RCP2.6）及び**4°C上昇シナリオ**（SSP5-8.5/RCP8.5）に基づき予測

→ 「パリ協定の2°C目標が達成された世界」と「追加的な緩和策を取らなかった世界」で生じ得る気候の状態に相当。

以下の各資料で構成

- 概要版
- 本編
- 詳細編
- 都道府県別リーフレット
- 解説動画
- 素材集

日本の  
気候変動  
2025

（作成中）

最新の情報を反映し、  
より充実させた内容に

都道府県別  
リーフレット

管区・沖縄気象台  
気候変動ウェブサイト

## より簡略な説明

- ✓ 気候変動に関する入門資料
- ✓ 初心者向けに講演する際のスライド

## 概要版

形式：スライド  
pdf版・ppt版 **New!**

## 本編

形式：報告書  
pdf版・html版 **New!**

## 詳細編

形式：報告書  
pdf版

気候変動に関する根拠や解説を、要素ごとに観測結果と将来予測に分けて可能な限り平易な表現で簡潔に記述した報告書

- 気候変動に関する基本資料として閲覧
- 組織等の気候変動担当として最初に読む1冊
- 気候変動を学ぶ学生が最初に読む1冊

## より詳細な説明

- ✓ 気候変動に関する専門資料
- ✓ 本編を読む際に、個別の詳細を辞書的に参照

# 「日本の気候変動2025」章立て

本編	詳細編	
	1	はじめに
	2	気候変動とは（概観）
	3	大気組成等（温室効果ガス）
	4	気温
	5	降水
	6	降雪・積雪
	7	熱帯低気圧
	8	海水温
	9	海面水位
	10	海氷
	11	高潮・高波
	12	海洋酸性化
(コラムに記載)	13	大気循環
	14	海洋循環

観測結果と将来予測で節を分けて記載  
(詳細編は世界と日本でも分けて記載)

・ 2020本編では別章としていた  
**観測結果と将来予測を、2025では  
一つの章に。**

・ **本編と詳細編とで章番号を揃え、  
相互の参照性を向上。**

## 【本編】

1. 将来予測
2. 1.5°C/3°C上昇で起こる将来変化
3. さくらの開花とかえでの紅葉・黄葉日の変動
4. XX年に一回の現象とは
5. 水災害への対策と気候変動
6. 大気循環、海洋循環
7. 気候変動適応法及び気候変動影響評価報告書について
8. 地域気候変動適応センターにおける取り組み～埼玉県の場合～

## 【詳細編】

1. 将来予測の不確実性
2. 十年規模変動と近未来予測
3. IPCCの排出シナリオ
4. 気候予測データセット2022
5. 都市気候
6. 過去1200年の京都のサクラ満開日
7. 極端現象の確率的表現について
8. イベント・アトリビューション
9. 洪水への取り組み
10. 土砂災害への取り組み
11. 海洋熱波
12. 日射量の将来予測

# 「日本の気候変動2020」からの主な改善点

## ● 最新の科学的知見及び成果を反映。

- 新たに公表された論文等の文献から収集した最新情報を掲載（IPCC第6次評価報告書等）。
- 共通社会経済経路（SSP）シナリオに基づいた評価を可能な限り行った。

## ● 観測結果では、可能な限り最新の期間（～2024年）までデータを延長。

## ● 将来予測では、最新の気候モデルを用いた結果を使用。

- 地域的な再現性等が向上
- 海洋酸性化等におけるモデルを用いた将来予測の評価が、海洋物理環境と整合

New!

## ● 100年当たり一回等の頻度で生じるような発生頻度が低い極端現象（大雨・高温）が、地球温暖化の進行に伴いどのように変化するかについて、確率的表現を用いて評価。

温暖化の程度	1.5℃上昇	2℃上昇	4℃上昇
100年当たりの発生頻度	1回	約XX回	約XX回

New!

## ● 過去、現在及び未来までの気候変動を連続的に理解できるように、過去～現在～未来を一連とした情報を提供。

New!

## ● 本編はpdf版に加えてhtml版も掲載し、ウェブサイトで図とその元データも提供。